最後の三日

カオリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
最後の三日

【Ｎコード】
Ｎ６３７８Ａ

【作者名】
カオリ

【あらすじ】
高校三年の夏の終わり、「私」は三年前の約束の場所へと向かった。あの日の言葉は本当なのか。そして、彼女の知らない真実とは？――忘れないで欲しい。あの日の約束を、誓った永遠を。思い出して。私達の、最後の三日――

前編

震える両手で蝶番が軋まぬよう細心の注意を払いながら、ゆっくりと玄関の扉を押し開けた。
気持ちばかりが急いてしまって、まだ開き切らぬ扉の僅かな隙間に体を滑り込ませる。

ひどい耳鳴りに混じり、滑稽なほどに速い心臓の鼓動が耳の奥底に響くのに耐えられなくて、一度強く目を瞑った。
閉めるときも静かに、慎重に。呪文のように自分に言い聞かせながら、ぎゅっとドアノブを握る。息を殺して扉を閉じ切ると、同時に大量の汗が体から吹き出した。
深呼吸を繰り返すうちに漸く耳鳴りが消えて、代わりに鈴虫が鳴いていることに気が付く。

そうだ、まだ終わってないんだ。

首からさげた銀の合鍵で、今し方閉めた扉に鍵を掛ける。施錠する瞬間のカチャリという音が予想より大きく響いてしまい、一瞬頭の中が真っ白になった。耳を扉に押し当てる。大丈夫、誰も気付いていない。
その後も散々確認した挙げ句、私はやっと安堵の息を吐いた。
玄関前の白いタイルに座り込んで辺りを見渡せば、目に映るのは消えかけた街灯の白色電光だけだった。
夜空の色は深い紺。初めて見る真夜中の色に、興奮と後悔の入り混じった形容し難い感情が押し寄せて涙を誘った。
腕時計に目をやる。時刻は午前一時五十分を指していた。約束の時間まで、あと十分しかない。荷物は事前に駅のコインロッカーに預けておいた。あとは、集合場所に向かうだけ。

けれど、皆はちゃんと約束どおりやってくるだろうか。
タケは？　ハナエは？　ミズホは？　ショウは？　ケイ君は？

（大丈夫。きっと、大丈夫）

私は勢いを付けて立ち上がると、夜風に押されながら我が家を後にした。

私が駅構内のコインロッカーの便利さに気が付いたのはつい最近だ。ここを利用すれば、いつだって家を出ることができる、と。
今日の『約束』の存在を思い出したのもちょうどその頃だった。正直、約束を忘れなかったことは奇跡に近いと思う。皆はやはり、忘れてしまっているかもしれない。

（……三年も、前の話だ）

コインロッカーの前に清掃員がいるのが見えた。何も躊躇する必要などないのに何故だか後ろめたい気持ちになって、清掃員が移動してくれるまでロッカーの陰に隠れて待っていた。
清掃員がいなくなったのを確認して漸くロッカーの前に立つと、中から大振りのスポーツバッグを取り出す。
ずっしりと重いこれの中には、前々から準備していた今後の生活用

品が入っている。
私は以前から家出の計画を立てていた。誰にも告げずに、私を取り巻く世界から消えるつもりだった。
――成し遂げる気でいたのだ。今日が約束の日だと、気付くまでは。
清掃員のおかげで余計な時間を食ってしまった。待ち合わせの時間はとうに過ぎてしまっている。私はスポーツバッグを肩に掛け再び走りだした。
当初の予定ではそのまま駅から電車に乗るつもりであったけれど、計画は変更だ。
約束を、あの日の言葉を確かめてみたかった。私の足は自然と駅の外へと向かい、約束の場所へと進んでいく。急がなくちゃ、あの古い神社へ。

私の住む町は、上水流（かみずる）町という。田舎というわけではないけれど、静かで自然の多い町だ。長閑な畦道や民家を除けば、あるのは小さな学校と工場ぐらい。何も無い、と言っても構わないと思う。隣町は、もう少し賑やかなのだけれど。
けれどその上水流町で、三年前に一家惨殺事件が起こっている。犯人は今も捕まっていない。この事件は私に『あの日』を思い出させる上で、重要な背景を担っていた。
約束を――契りを交わしたあの日、住民は潜む殺人犯を恐れ、夜の上水流町には人の気配などなかったのだ。もちろんあの神社には私達以外誰もいなかった。そうだ、あの人が来るまでは。

古ぼけた赤の鳥居が見えた。懐かしい。本当に、久しぶりだった。
私は息を切らしながら、鳥居へのびる石段を駆け上がる。
視界が開けると、私はゆっくりと深呼吸をした。
石段を上りきると目の前に広がったのは、長い長い並木道だ。鬱蒼と生い茂る木々が夜闇の中でざわざわと揺れる。吸い込んだ空気と一緒になって杉や樫の匂いと、ここで過ごした――あの日までの思い出が体中に流れ込んだ。
鳥居の表面に見つけた、親指ほどの長さの傷の上に指を滑らせる。
これは、タケとショウが付けた傷だった。

――どうして、泣きたくなるんだろう？

顔を上げ、私はゆっくりと鳥居を潜った。
この並木道を抜ければ本殿がある。記憶が正しければ、そこが約束の場所だった。
何故だか分からないけれど、今の私には自信があった。
皆は、きっとあそこにいる。
一歩一歩進むうちに、自信は確信に変わった。

「……こ」

ほら、声が聞こえる。
私は残りの距離を一気に駆けた。不思議と、荷物の重さは感じなかった。
前へ、前へ。自然と足取りは軽やかになる。三年という時間は、懐かしむにしては僅かに短いのだろう。けれど、待つには長いと思う。
何故か焦りを感じた。はやく、あいたい。
本殿の前に三つの人影が見える。そのうちの一人が、こちらへ大き

く手を振った。

「チョコ！　こっちだよ」

ちょこ。聞こえた音に思わず口が綻んだ。私の小学校の時の渾名(あだな)だ。彼らだけは、今でも私のことをそう呼ぶ。

「ケイ君」

人懐っこい笑顔を浮かべる彼を前にしてすっかり緩んでしまった顔を、私は隠すこともなく歩み寄る。ああ、ケイ君だ。同年代の男の子の中でも一際幼く見える彼は、その可愛らしさと憎めないキャラクターで中学のクラスでもちょっとした人気者だった。
久しぶりに会ったというのに、ケイ君はちっとも変わらない。

「ちょっと見ない間に、チョコってば随分変わったねぇ」

ケイ君が私の姿を上から下まで眺めて言った。
確かに私は、見た目なら変わったかもしれない。長かった髪を明るいブラウンに染めてボブにしたあげく緩やかなカールまでかけているし、化粧だってしている。私の通う高校は私服校なので、その点は自由だった。
それにしても、三年の年月を『ちょっとの間』と称すケイ君は素敵だと思う。変なんだけれど、そこが彼のチャームポイントだったから。

「遅刻だぜ、チョコ」

次に私に声を掛けたのはショウだった。学年一のお調子者は健在のようだ。

その後ろからこちらに近づいて来るのはミズホだろう、きっちりとした三つ編みが肩の辺りで揺れているのが見える。三年前と寸分違わぬ髪型が妙に面白い。
そこまで考えて、私は人数が足りないことに気が付いた。

「あれ、タケとハナエは？」

ああ、と。ミズホはどこか困ったように笑う。この笑顔も、昔から変わらない。

「ハナエなら……」
「ハナエって呼ばないでよ、ダサいからぁ」

木の陰から現れたハナエを見て、思わず私も笑いそうになった。
ハナエは小学校、中学校ともに問題児扱いをされていた生徒で、言ってしまえば『不良』のカテゴリー分類される人間だ。今の格好などその典型で、上下グレーのスウェットに脱色した髪、不貞腐れたような口元からは消えかけた煙草が覗いていた。私にとってはお馴染みの、彼女のスタイル。

「ハナって呼んで」
「はいはい」

懐かしい会話に、とうとう私は笑ってしまった。ハナエは自分の本名を呼ばれると必ず怒るけれど、最終的にいつも私達だけは許してくれる。そんな、お決まりのやりとりが私は好きだったことを思い出したのだ。

「久しぶりぃ、チョコ。遅かったじゃん。まさか、忘れてたとか？
ハナだって今日はちゃんと来たよぉ」

独特の間延びした口調を崩さぬまま、ハナエは煙草をぽいと投げ捨てた。それを慌てて踏み消すミズホをショウが笑って見ている。ハナ、まだ未成年でしょ。わかっていても誰も言わない。なんだか本当に、中学時代に戻った気分だ。

「で、タケと言えばご存じ遅刻魔だ……勿論、まだ来てねぇ」

ショウが顔をしかめてみせる。彼がこうする時は怒っているわけではなく心配しているのだと、私はよく知っていた。ショウも三年前と変わらない様子で安心する。彼らには変わってほしくない。ふと、どこかに目をやっていたショウの表情が弛んだ。ケイ君が歓声をあげるのが聞こえる。理由は一つだ。確認しなくたってわかる。

「大遅刻だぞ、タケ」

私はゆっくりと振り返った。並木道を抜けたばかりのタケは私達を目にすると、ひどく驚いた顔を浮かべる。彼はそのままそこで硬直し、口だけを動かした。

「お前等……！　何で、ここにいるんだよ！？」
「はぁ？」

自分が遅刻したことも忘れて大声で叫ぶタケに、ハナエが冷めた視線を送る。鋭いそれは不良がガンを飛ばす時の様子に酷く似ていて――実際ハナエは飛ばしていたのかもしれない――睨まれたタケは僅かに震えた。

「ハナ達が約束守らないわけないじゃん。自分が一番遅いくせにぃ」

釈然としない表情が消えないタケにショウが歩み寄り、笑ってその背を押す。そうされる間にも、タケは何か言いたげな表情を浮かべてショウの顔を見つめていた。
タケの様子がおかしい理由は私にもわからなかったので、とりあえず挨拶だけは交わしておく。久しぶり、と言えば、あー、と生返事。せっかく久しぶりの再会だというのに変なやつ。

「チョコ。お前、その荷物何？」
「あ……ああ、これ」

ショウに問われて、私は漸く足元のスポーツバッグの存在を思い出した。
ケイ君とハナエが興味津々でこちらを見るので、実は家出の計画を立てていたことを簡潔に説明する。結局は未遂に終わりそうなのだけれど、何故かケイ君は顔を輝かせた。

「格好良いー」

なにそれ、と私は笑う。このワンテンポずれたやり取りが、昔から私を癒してくれるのだ。このメンバーで過ごしているだけで、どうして救われる気がするんだろう。　他の些細な事なんて、どうでもよくなってしまう。

「今日ここに皆がいなかったら、このまま家には帰らないつもりだったの」
「おお、来てよかった。チョコに行方不明になられちゃあ、俺たちが困るんだよ」

口は悪いけれど優しいショウ――川嶋　翔が、ぽんと私の肩を叩いた。

ケイ君こと早川　慧、関　瑞穂、杉浦　花恵、川嶋　翔、それからタケ――木内　武臣、それに私を入れて六人。
私達は三年前にこの場所で約束をした。あれは中学三年の、夏休みの終わり。
正直細かい内容は覚えていないのだけれど、三年後にこの場所にもう一度集まることになっていた。今日のことだ。今日の、午前二時。

「あれからもう三年だ。俺たち、高三だぜ……早いよなぁ」

何かを噛み締めるかのようにタケが言うのが聞こえた。ショウとハナエが曖昧に笑う。ミズホが少し悲しそうな顔をしたが、何故かはわからなかった。ケイ君だけが、きょとんと不思議そうな顔をする。タケ達は中学を卒業するまでは一緒に過ごしていたはずだが、私は中三の夏休みが終わった直後に親の希望で隣の学区の中学へ転校していたので、皆に会うのは丸三年ぶりだった。いや、タケには一度だけ会ったことがある。けれど他の四人には、転校以来会っていなかった。学校が変わっただけで、家は同じ場所にあったのに。

（そういえば）

何故私は、すんなりと転校したのだろう。大好きな友達と別れる道を選んだなんて。私は転校を承諾した時の気持ちを、いまひとつ思い出せないでいた。

「ねぇ、私達は約束を守ったよね。全員ちゃんと集まったもの……あれは、本当だと思う？」

ミズホが恐る恐る口にした言葉は、今誰しもが思っていたことなのだろう。私は皆を見つめた。ケイ君がごくりと唾を飲み込んだのがわかる。

「あいつ、来るかな」
タケが呟いた。あいつって誰ぇーなどと、とぼけた様に尋ねるハナエに、ケイ君が緊張した面持ちで答える。
「サトマさん」
確かめれば良いとショウが言った。腕を前に伸ばすと、真直ぐに本殿の裏を指差して。
私達は神妙な面持ちで頷いた。それしかない。
「行こうぜ。契約の場所に、な」
私達が契りを交わした約束の場所は、正確にはここではない。
本殿の裏にひっそりと生き続ける巨木の根元――『サトマさん』の護る、『永遠』の菩提樹だ。
私達はゆっくりと本殿の裏手に回る。ケイ君だけは待ちきれなかったようで、一足早く行ってしまった。
「なぁ、ショウ」
私の後ろでタケが小さく呟いたのが聞こえる。深刻そうな声が気になったけれど、私をハナエが急かすので振り返ることはできなかった。
タケは、消え入りそうな声で続けている。
「俺は、夢を見てんのかなぁ」
聞き間違いではないと思う。

夢。私にはそう聞こえた。何が、夢だというんだろう？
――やっぱり、なにか。今日のタケは、変だ。

「夢じゃないぜ」

ショウは笑っている。でも、と何か言い掛けたタケの言葉は、私達を呼ぶケイ君の大声で掻き消えてしまった。
ケイ君は一本の巨大な古木を見上げながら私達を待っていたようだ。
……菩提樹。この町を護り続けてきた神の木だと、あの人は――『サトマさん』は言った。

――――エイエンガホシイデスカ？

すぐ後ろから声が聞こえた気がして、思わず私は振り返った。心臓が鷲掴みにされたような感じがする。息苦しい。何なんだろう？

「チョコ、どうしたの？」
「……何でもない」

ゆっくり呼吸を整える。タケも変だけれど私も変だ、今日は。
少しばかり過敏になっているのかもしれない。親友達との再会だとか、夜の闇のせいで気持ちが高ぶっているのかも。

「永遠が欲しいですか」
「……！」
「って、言ってたな“サトマさん”」

今度こそ飛び上がりそうになって必死で横を向くと、にんまりと笑

うショウの顔が目に入る。
私の心臓が早鐘のように打っていることを知ってか知らずか、こいつめ。

「いないね、サトマさん」

ケイ君がぽこりと菩提樹を叩くのを、呪われるよとハナエが笑った。
記憶力の悪い私でも、あの日のことだけは鮮明に思い出せる。
私達は上水流神社を訪れて、それは夏休みの終わりのことで、しかも深夜で。
神社に来ることがあるとすれば初詣ぐらいだった私達には、本殿の裏にあんなものがあるなんて知る由もなかった。
初めに菩提樹の存在に気が付いたのはケイ君だ。いつも勝手にいなくなってしまう、悪い癖のおかげ。

「最初にこれ見た時は、本当に木なのか、疑いたくなっちゃって」

ミズホが菩提樹にもたれかかり、小さく笑った。
今にも朽ちて崩れてしまいそうな樹皮とは裏腹に、あまりにも太く、力強い幹。揺れる心臓形の葉……生命の息吹が、確かに聞こえたような気がした。
――そしてこの上水流の御神木が、私達の目により神秘的に映った原因。それが、サトマさんの存在だった。

「俺、妖怪が出たのかと思ったもん。あの人急に現れたから」

ショウが思い出を確かめるように、ゆっくりと菩提樹に触れる。
私も巨木の根に腰を下ろし、あの時の様子を思い浮べた。
優しそうな、線の細い男性だった。白い着物を身に纏い、突然現れた彼。サトマだと、本名なのか偽名なのか、どんな漢字を当てはめ

るのかもわからない名を告げた彼。菩提樹を発見し得体の知れない空気に飲み込まれていた私達に、これは永遠の木だと彼は言った。

「夜中だったのにさ、一人で俺たちに話し掛けてきて」

「不気味だったよね。ハナ、あの人おばけかと思ってたしー」

ハナエの言葉にくすくすとミズホが笑う。

私もそれにつられるように笑い声を上げながら横を見れば、タケが何故か菩提樹を睨み付けていた。

「タケ？」

私が小声で呼んでも、タケは顎をしゃくって話の続きを促しただけで。

「約束の内容、覚えてるか？」

ショウが私達を振り返る。タケが小さく頷く横で、ハナエは首を傾げると苦笑を洩らした。

「はっきり覚えてないかも、ハナお馬鹿さんだから」

「えぇー？　もう忘れちゃったの、早すぎだよ」

ケイ君は口を尖らせてハナエを非難する。彼にとっての三年間はあっという間に過ぎてしまったのかもしれないが、普通三年もすれば、記憶の一つや二つ曖昧になると思うのだけれど。私の記憶も実は曖昧だったので、余計なことは言わないことにする。ケイ君の機嫌を損ねるのは御免だ。

「これは永遠をくれる木だよ、ってサトマさんは言ったんだ。菩提

樹に誓いを立てれば永遠が手に入る。それには、三年後に全員でここに戻って来るっていう約束をしなくちゃいけないんだ。約束の日にちゃんと全員揃えば、その時一番欲しかったものが手に入るとも言ってたよ。それから、その日に永遠は完全なものになる、って」

ケイ君はすらすらと言葉を紡ぐ。それを聞いて、私の頭の中には約束をした日の光景が鮮やかな絵のようにくっきりと浮かんでいた。

――私達の欲しかった永遠は、私達そのものだ。永遠の友情を、私達は誓った。

サトマさんの儚い笑みは、今でも私の脳裏に焼き付いている。

『それでは、約束です。三年後の明日、ですよ――忘れないで、くださいね』

誓いを結んだ日の翌日から数えて、ちょうど三年後。それが私達の再び集う約束の日だと、彼は言った。つまり私達が誓いを交わした日は、実際は三年前の昨日にあたる。

サトマさんには、全部で二回会った。

初めて彼と出会った夜に菩提樹の伝説を聞き、次の日の晩、誓いを結んだ。その翌日は夏休み最終日で、最後にもう一度だけ神社に行ったけれど、サトマさんは現れなかった。

――――それ以来、二度と。

「一番欲しかったものが、手に入るはずなんだろ？」

タケが漸く口を開く。それを聞いたケイ君が落ち着きなく視線を泳がせるのが可愛らしかった。欲しかったものが手に入る――私も勿論、そのことは覚えている。正直嘘っぽいと思っていたけれど、当時中学生だった私達にとってはとても魅力的な言葉だったからだ。

「ケイ君は何が欲しいの？」
「アイキュー」
私の問い掛けにケイ君は直ぐ様答える。
自分の望むものをはっきり言える彼が羨ましかった。私は何をするにも中途半端で意志が弱い。最近は進路のことで親と話し合う機会が増えていたから、なおさらそれを痛感していた。母にあなたは何がしたいのと問われても、首を横に振ることしかできない――自分の無力さがやるせなくて、消えてしまいたかった。
今日は皆に会うためにここへ来たけれど、もし……もしも私の『一番欲しいもの』がわかるなら、素敵だと思う。
「受験を難なく乗り越えちゃうような、天才的な知能が欲しいなぁ」
「ケイらしいな」
ショウが俺も欲しい、と笑った。ミズホは三つ編みに指を絡めながら、楽しそうな、けれどどこか切なそうな面持ちでケイ君を見つめる。
「ハナは、やっぱお金が欲しかったかなぁ」
あまりにもハナエらしい夢の無い答えに私は笑ったけれど、タケは僅かに眉根を寄せた。
タケは――私の知っているタケは、いつだって笑ってばかりいたのに。
「ハナエの人生、金が命だもんなー。じゃあ次はチョ……」
「ショウ、お前は？」
「ん？」

私のほうを向いていたショウは、突然の声に僅かに驚いてタケを振り返った。
タケは真直ぐにショウを見つめている。二人とも向かい合ったまま暫く何も言わず、私には時間が止まったかのように感じられた。

「ショウ――お前の、欲しいものは何だ？」

ショウは二、三度瞬きを繰り返した後、ゆっくりと、そして静かに笑った。

「……お前と同じだよ、タケ」

その言葉にタケが目を見開いた。ミズホがはっとしたように口を噤む。ハナエが笑う。ショウも、笑い続ける。ケイ君が首を傾げる。それを見ているだけの、私。

「なーんてな、冗談だよ。つーか、お前の望みなんて知らねぇし。タケの欲しい物って何？」

タケが表情を曇らせた。ショウはそれに気付かないフリをして、いつもの軽い調子でタケに問う。

「欲しいものなんか、ない」

タケはそう呟くと私たちに背を向ける。

「タケ、どこ行くの」

「便所ー」

そう言い残して、タケは本当にトイレのほうへ歩いて行ってしまっ

た。

それから後は別段変わったこともなく、私達は他愛ないお喋りや思い出話に花を咲かせた。トイレから帰って来たタケが何事もなかったかのように合流して、ケイ君が迷子になったときのことやハナエが煙草を吸って自宅謹慎になった時の話を愉快そうに語る。私とミズホは、煙草を取り上げられた時のハナエの様子を思い出し顔を見合わせて笑った。

どんなにたくさんの話をしても、タケ達は私が転校した後のことには一切触れなかった。
きっと、同じ思い出を共有していない私に気を使ってくれたのだと思う。皆の優しさが嬉しい。

「あれやろうぜ、久しぶりに」
話の種が尽きてきた頃にショウがそう言い出して、私達は神社の境内全てを使って鬼ごっこに興じた。

闇鬼、と言う。

鬼をくじで決めて、誰が鬼なのかわからない状態ではじめる。鬼が逃げる役のフリをして騙すも良し、逃げる役が鬼のフリをして楽しむのも良しという一風変わったルールの遊びで、私達が小学生の頃に流行していたものだ。

私は一度も鬼にはならずに、鬼のフリをしてケイ君を驚かし、仲間だとばかり思っていたミズホに捕まった。

楽しかった。楽しくて、幸せで、少しだけ寂しかった。

ふと見上げた空が白みはじめていた。藍色と青と、靄がかかったような水色のグラデーション。

私達は汗だくになって、再び菩提樹の元へ戻っていった。
菩提樹を全員で円形に囲み、幹を背にして座り込む。お互いの顔は見えなかったけれど、それで良いような気がした。木々の間を吹き抜けてくる風が心地良い。

「朝が来るね」

ケイ君が呟いた。私もタケも、静かに頷く。
結局サトマさんは現れなかった。欲しいものが手に入るというのも、嘘だ。私達は三年間、冗談だと知りつつも諦めきれないで約束を胸にしまっていた。可愛らしい、夢を見ていたんだ。

でも。

「私ね、『永遠』は手に入ったと思うよ」

何で？　と問う皆に、私はゆっくりと囁いた。私の見つけた、永遠の答え。

「三年間会ってなかったのに、こうしてちゃんと全員集まって。この友情は消えないって、わかったじゃない。違う？」

少しの沈黙が流れる。それから、柔らかく息を吐く音があちこちから聞こえた。

「……そっかぁ」

「そうかもな」

ハナエとショウが笑う。
私は幸せだった。これ以上は何もいらなかった。私の一番欲しいものはきっと、もう手に入っている。

「永遠……だったら、いいなぁ……」

ミズホの声は、震えていた。私はただ夜が明けることの寂しさを噛み締める。
高校へ行っても、皆はいない。
――でも、きっと私はこれからも高校に通うと思う。私には仲間がいる。それを確認できただけで、この先も頑張っていける気がした。

「朝が、来るよ」
「うん」

もう一度ケイ君が呟く。空の色がどんどん鮮やかになっているのがわかった。

「帰らなきゃね」
「そうだね」

私は頷いた。今日は夏休みの最終日だった。明日は始業式だ。学校へ行くつもりならば両親が目を覚まさないうちに家に帰って、寝ていたフリをしなければならない。それから、新学期の準備をしないと。

ケイ君が立ち上がって伸びをした。色の変化する、まだ薄暗い空に向かって手を伸ばす。

――そのときタケが、小さく呟いた。

「……帰るのか、ケイ」

「うん、帰るよ。内緒で来たから、バレたら叱られるんだ……もっと喋ってたかったけど」

タケはケイ君から視線を逸らさなかった。ケイ君もタケを見つめる。

「どこに、帰るんだ？」

タケの不可解な言葉にケイ君は目を瞬いた。私にはタケが何を言おうとしているのか、さっぱりわからない。

「何言ってんのタケ、家にきまってんじゃん。明日は始業式だよ？家帰らないと、準備とかできないし」

私も立ち上がる。ケイ君の言うとおりだ――けれどタケは、菩提樹の根に座り込んだままだった。

「タケ？　私達も帰んないと」

タケは微動だにしない。変なタケ、とケイ君が笑った。

「先に帰るよ。チョコ、タケ、ハナエ、ショウ、ミズホ、また明日学校でね」

私は思わず吹き出しそうになる。これだからケイ君は、ケイ君なんだ。本当に面白い。

「やだ、ケイ君ったら。私とは学校が違うんだから、その挨拶は変だよ」

「……え？　チョコってば転校でもするの？」
ケイ君が驚愕の表情を浮かべ、慌ててこちらへ引き返してきた。
――会話が噛み合っていないようだ。何やら勘違いをしているらしいケイ君に、私は笑ってみせた。
「転校は、したけど。それって中三の夏休み明けの話だし……そうじゃなくて、高校が別じゃない」
「高校？」
ケイ君が顔をしかめる。彼は暫し考え込んでから、うん、と言った。
「そうだね、志望校は別だった……」
「そうじゃなくて――」
突然タケが立ち上がった。私が驚いて振り返ると、タケは静かにこちらに歩いてくる。
「ケイ、お前、覚えてないのか？」
「何が？」
ケイ君は憮然とした面持ちを浮かべる。意味のわからないタケの質問に少し苛立っているのだろう。
「本当に、覚えてないのか？」
「だから、何？」
「――ケイ君」
何か、おかしい。私は混乱して、自分を落ち着かせるために深呼吸をした。冷たい空気が胸に入ると少しだけ頭が冴える気がする。

「私達もう高三だよ？　さっきケイ君も言ってたじゃない。大学受験を乗り越える知能が欲しいって――」
「何の冗談？　僕が言ったのは、高校受験の話だよ」
ケイ君は私とタケを交互に見つめる。
「だって、僕達まだ中学生じゃないか」
――何の冗談だ。そう言いたいのは私のほうだった。
けれど、冗談を言っている素振りなどケイ君は見せない。
「ケイ……俺達がここで誓いを立てたのは、いつだ？」
「馬鹿にしてんの？　タケ」
ケイ君は語尾を荒げる。私は彼がその言葉を口にするのを、ただ見ていることしかできなかった。
「昨日だよ」
一際強い風が吹いた。ざわざわと揺れる木々の間で何かが蠢いて、私達を見ているようだ。
「ケイ、君……？」
私の中に得体の知れない感情が沸き上がって、押しつぶされそうだった。
なんで。どうして、こんなに胸が騒つくんだろう。
何もおかしなところなんてない。ケイ君は少しもかわらない、私の知っているケイ君のままじゃないか。

ケイ君は――――ケイ君、は。

……そうだ、変わらない。

けれど、でもそれは……『少しも変わらない』んじゃなくて。三年前と、『全く同じ』なんだ。

身長も髪型も、声も、全てが三年前のまま。

――馬鹿なことを。私は、今一体何を考えてしまったんだろう？

「ケイ君……」

「もぉ良いよ。皆で僕を騙そうったってそーはいかないんだから。帰るよ、僕」

ケイ君は不貞腐れたようにそっぽを向いて言う。

私は声が喉に貼りついてしまったような錯覚にとらわれて、一言も発することができなかった。

ケイ君は私の様子をちらりと見ると、訝しげな表情を浮かべる。

「何だよ、そんな顔してさ……皆も早く帰ったほうが良いよ。この前の殺人事件、まだ犯人捕まってないじゃないか。今の時間帯、人が少なくて危ないよ」

ケイ君の言葉が私の耳から体へ入って、脳をがんがん殴り付けているようだ。

頭が割れそうに痛い。

「ケイ、それは――三年前の事件だよ」

タケが静かに告げる。ケイ君は一瞬何を言われたのかわからなかったようで、ぱちぱちと瞬きを繰り返していた。

「……だからぁ、いつまで僕をからかうわけ？　僕は昨日の夜もこのニュースがテレビでやってるのを見たんだから」
「ホントだぜ、ケイ」
黙って様子を見ていたショウがおもむろに口を開く。ケイ君はぽかんとしながら、ただショウの言葉を聞いていた。
「今日は約束の日だ。誓いを立ててから三年経ってる。俺達は高校三年になっているはずの年で、お前の言う『今日』は俺達が中三だった――三年前に終わってるんだよ」
「どういう、こと……？」
ケイ君の顔色が僅かに変わった。ショウはケイ君を真っすぐ見つめながら、静かに次の言葉を紡ぐ。
「ケイ、お前は気付いてないんだよ。自分が――」
「……やめて！！」
突如叫び声が響き渡る。ミズホが立ち上がり、私達の前に飛び出した。
「やめて、やめてあげて！ケイ君のせいじゃない。ケイ君は何も悪くない！私が、私が……！」
「……ああ、ケイのせいじゃない！でも、お前のせいでもなかった！！」
タケが聞いたこともないような大声で叫ぶ。
泣きじゃくるミズホに向けて怒鳴るタケが次に言おうとしていることを、何故か私は聞きたくなかった。「お前は悪くなかったのに！」

聞きたくない。聞いてはいけない気がする。やめて。

「なのに……！」

やめて。やめて。

……けれど私が耳を塞ぐよりも、タケが声を出すほうがずっと早かった。

「なのに、何でお前まで死んだんだ、ミズホ！！」

――恐ろしく強い音の波が、私の耳を劈いた。

後頭部を強打されたような衝撃と、激しい吐き気が襲ってくる。視界が歪んだ。ミズホの悲鳴が、タケの怒号がぐるぐると回る。回り続ける。

「タケ……何言ってんの……？」

やっとの思いで絞りだした私の声はひどく擦れていた。

静かに私を見つめるタケの顔が悲しそうで、それ以上は何も言えなくなる。

「チョコ。お前は、忘れてるんだよ」

「タチ悪い冗談はやめてよ……」

私は泣き続けるミズホに目をやった。ミズホは、ここにいるじゃないか。

「チョコ……」

嗚咽に混じって小さく声が聞こえた。ミズホが両手で顔を覆う。

「ごめん……ごめんね。私、チョコがこんなことになるなんて思ってなかった……！！」

「何言ってるの？　ミズホってば……」

わけが分からない。まさか皆一緒になって、私を騙そうとしているのだろうか。

そうこうしている間にも頭痛と吐き気がひどくなっていく。水が欲しかった。

「何だよ、ミズホまで一緒になって僕を騙そうっての？　ミズホが死んでるわけ――」

ふとケイ君は口をつぐんだ。ショウが自分をじっと見つめていることに気が付いたからだ。

――哀れみに満ち溢れた眼差しで。

「……嘘だ！そんな、まさか！！」

ケイ君がよろめく。同時に、タケが私の肩を掴んで力一杯引いた。タケの爪が肌に食い込んで血が滲む。

「タケ」

「お前はこの三年間、見ないフリをしてきたんだ。思い出せ、チョコ。何で俺達は三年間も会わなかった？　なぜお前は転校した？」

「タケ……やめて」

私はタケの手を外そうと身を捩ったが、少しも動かなかった。痛い。痛い。

「サトマと出会った後、誓いを結んだ後、一体何があった？　俺達が一緒に過ごした夏休みの終わりは――」

「嫌だ……！」

頭が痛いのか肩が痛いのか、わけがわからない。喉も肺も心臓も、全てがズキズキと痛んだ。

タケに続きを言わせてはいけない。それだけはわかる。聞いては、ダメだ。

嫌だ。タケ、嫌だよ。

「――あれは、あいつらが生きていた最後の三日間なんだ！思い出せ、梢！！」

「……嫌だあぁあぁぁあっ！！」

後編

……誰かが私を呼んでいる。『チョコ』じゃなくて、こずえ、って。
ああ、そうか。私の本名だ――ちよだ、こずえ。
チョコ、は私の渾名。『千代田』と『梢』の両方からとって、チョコ。

私には小学校からずっと一緒だった、五人の親友がいる。私に渾名を付けたのも彼らで、私はこの渾名を気に入っていた。
皆が私をチョコと呼ぶ瞬間の、優しい響きが。柔らかい声が、大好きで。
彼らと一緒にいる間は、私は梢ではなくチョコだった。

木内　武臣はいつも私を気に掛けてくれる、不器用な優しさの持ち主だ。学校では私達以外とはほとんど喋らなくて、『木内君って恐いよね』だとか『タケオミ君って一匹狼だ』などと言われていた。

関　瑞穂は何においても真面目で、責任感が強い。自分で全てを背負い込んでしまう繊細な子で、他人とは壁を作ってしまいがちだった。それでも何かにつけて私を助けてくれる彼女は、とても頼もしい存在だった。

それに対して川嶋　翔は、誰とでもすぐに打ち解け仲良くなれる、天性の明るさを持っていた。何故彼が私達と一緒にいるようになったのかと、今でも私は不思議に思う。気付いたら、そうだったのだ。

早川　慧は人懐っこい性格と穏やかな人柄がクラスメートに大人気だった。誰よりも幼く見えて、可愛いと言う言葉がぴったりだ。そして彼もどういうわけか、何時の間にやら私達の一員だった。

杉浦　花恵は不良だった。煙草を隠れて吸うのはしょっちゅうのことだったし、髪だって染めていた。付け爪、エクステーション、ピアスに化粧。禁則を片っ端から破っている彼女に近づこうとするものはいなくて、クラスでも一際浮いた存在だった。けれど、彼女は優しくて寂しがりやだ。

「こずえちゃんってさ、何であの人たちと一緒にいるの？」

そう言われたのは、何時だっただろう。私達は傍から見れば異質な集団で、近寄りがたい空気を発していたらしい。
でも私は、皆のことが大好きだった。
好きで、仕方がなかったんだ。

私達はいつも一緒だった。小学校で初めて同じクラスになった日から、中学へあがってもずっと。
中学校に入学してからは全員が同じクラスになることはなかったけれど、放課後毎日のように集まっては遅い時間まで共に過ごした。
誰も部活には入らなくて、代わりに六人でよく遊びに出掛けていた。

三年生になると、さすがに辺りは受験一色になる。私達もなかなか時間を合わせることが出来なくなり、夏休みに入る頃にはすっかり受験戦争の波に飲み込まれてしまった。
ハナエだけは家の事情で進学を希望せず、学校にも来ない日が続いていたのを覚えている。ハナエの両親が離婚して、彼女は母親に引き取られたのだと後から聞いた。
その頃のハナエは『死にたい』が口癖で。たまに登校しても終始苛立っていて、教師も彼女の素行には手を焼いた。
受験生活の重圧に耐えきれなくなった私達がある計画を実行に移し

たのは、夏の終わりのことだ。
本格的な受験期に突入する前に、もう一度六人で思い出を作ろう、と。
誰が言い出したのかは分からない。私達が企画したのは、三日間のささやかな冒険だった。
表向きは泊まりがけの勉強会ということにして親の許しを得た私達は、夏休み最後の三日を思う存分満喫することにしたのだ。

朝から夜遅くまで遊び歩いて、疲れればその場で休息を取る。眠たくなんてならなかったし、眠ければどこでだって寝られると思っていた。殺人事件の犯人がまだ捕まっていなかったけれど、それすらも問題に感じないほどに気分が高揚していた。恐いものなんて、私達にはなかった。

「皆は受験生なんだから、合格祈願が必要なんじゃないー？」

ハナエがそう言って私達を神社に連れていったのは、初日の夜中のことだ。
人気の無い上水流神社は不思議と落ち着く空間で、しばらくそこで時間を過ごしていたらケイ君がいなくなって、そして――。

私達は、サトマさんに出会った。

「永遠が、欲しいですか？」

彼が一番はじめに言ったのはこの言葉だった。時刻が零時を回ろうとしている夜闇の中に、彼の白い着物が浮かび上がっているように見えた。悲鳴を上げて逃げ出しそうになったのは、ミズホだったと思う。

「わたくしは、サトマ、と申します。あなた方に、永遠を差し上げましょうか？」

サトマさんは私達に菩提樹の力を語り聞かせた。初対面の相手だったにもかかわらず、私は長い時間彼の話に聞き入っていた記憶がある。彼の話は不思議な魅力に満ちていた。

「これは、神の木なんですよ。『永遠』の木です」

サトマさんが菩提樹に触れれば、応えるかのように葉が揺れる。風が吹いたわけでもない。彼の指差すほうに目をやれば、蛍の群れが飛んでいた。この辺りには、小川など無いはずなのに。

「この菩提樹は願いを叶えてくれるんです。誓いを守ればあなた方の望む友情は永遠となり、約束の日を覚えていれば、その時最も欲しかった、一番大切なものが手に入るでしょう――永遠が、欲しいですか？　」

彼の一言一言に、私達は馬鹿みたいに頷くことしかできなかった。彼の話の、虜になっていたんだ。

誓いを結ぼうと言いだしたのはショウで、誰も反対などしなかった。私達はサトマさんの言い付けどおりに、翌日の午前二時にもう一度神社へ足を運んで。

「丑三つ、と申しましてね。古来より霊や物の怪が跋扈するとされた時間ですが、いい得て妙というところでしょうか。まさに神の木が霊験あらたかに在らせられる時刻なのですよ」

そして私達は菩提樹と誓いを交わした。誓いといっても、全員で手を繋いで菩提樹を囲っただけだ。サトマが何か言っていた気がする

けれど思い出せない。
その次の日は夏休み最終日で、私達はもう一度神社に向かった。本当に永遠が手に入ったのかをサトマさんに問いたかったのだが、いつまで待っても彼は現れなかった。結局最後まであの白い着物を目にすることができないないまま私達は家路に着いて、私達の冒険は――最後の夏は、終わった。

私は忘れない。皆の笑顔、声、全ての時間。ショウとタケが鳥居に付けた、『友情記念』の印も。
忘れないと、誓ったんだ。

「恒例のドッキリ企画を行なうー！」
「今年はどうするのぉ？」
「とりあえずプレゼントだろ」

九月一日。始業式の後に私達は集まって、二日後に控えたミズホの誕生日の相談をした。毎年誰かの誕生日が来るたびにサプライズパーティーを催すのはお決まりのことで、当人には内緒で計画を進めている。
この日私はミズホと無理矢理に映画を見に行く約束を取り付けて、その間に残る四人はミズホへのプレゼントを探すため隣町へ向かっ

た。

遅刻常習犯のタケは待ち合わせに見事遅刻。実際に隣町まで行ったのは、ケイ君とハナエ、ショウだけだったらしい。

隣町には今夏にオープンしたばかりのショッピングモールがあって、三人の目的地はそこだった。舗装されたばかりの大きな道、スクランブル交差点。そこに並ぶ人々の最高尾に三人はいた。

信号が青になる。足を横断歩道に踏み出す。動く人の群れ、騒めき、そこに現れた、大型のトラック。悲鳴、喚声、急ブレーキ、轟音、泣き声――――。

飲酒運転のトラックは、ハンドルを切ることも出来ずに横転した。

ケイ君は、即死だった。

「チョコ」

ミズホが、泣いている。駅のホームだ。隣町の警察に、事故の詳細を聞きに行った帰り。

「チョコ。私のせいだね」

電車を待ちながら、ミズホは静かに涙を流す。私は何も考えることが出来ずに立ち尽くしていただけだ。

「私の誕生日なんて、無ければよかったのに」

生温い風が吹いていた。プラットホームの赤錆の匂いがする。

「ごめんね、チョコ」

反響する、場違いなほどに明るいアナウンスの声。
マモナクデンシャガマイリマス。キケンデスノデキイロイセンノウチガワニオタチクダサイ。

「ごめんね」

全ては、スローモーションのように。
ミズホの体が線路に落ちて、ホームに滑り込むオレンジ色の列車に塵のように跳ねとばされ、腕が、足が、捻切れて、電車が急停車するまで。
私は、一度も瞬きすらしなかった。

――それで、私は、どうしたんだっけ？

「――嘘だあぁっ！僕は、僕は死んでない！！」
ケイ君が叫ぶ。ミズホは泣きながら地面に崩れ落ち、両耳を塞いで蹲る。
「ケイ！お前は、自分が死んだことに気付く間もなかったんだよ！一瞬で死んじまったんだ…！！」
ショウが声を張り上げた。
「そんなの嘘だ……！」
「お前は自分が死んだことに気付かないまま、この神社を彷徨ってたんだよ……」
「嘘、だぁ。だって、今日は……」
ケイ君がぺたりと地面に座り込んだ。ショウは拳を握り締める。
「――お前は、お前の魂は。今日此処に来た俺達を見て勘違いしちまったんだ。三年経ってるなんて知らずに……今日が中三の夏休み最終日だ、って。でも、思い出してみろよ。ケイはちゃんと、夏休み最終日は俺達と過ごしたはずだ。中学三年の俺達と……！」
黙り込んだケイ君を、私とタケは茫然と見つめることしか出来なかった。ハナエは一言も喋らずに、未だ菩提樹の根元に座り込んだまま。
ケイ君の体は、小刻みに震えていた。
「……ケイ君」

震えるケイ君。涙を流すミズホ。二人を見る毎に、私の頭の痛みは引いてゆく。鈍く曇った痛みの後に残されたのは、悲しいほどに鮮明な現実だった。頭の奥底を覆っていたものが、容赦なく引き剥がされていく。

「……本当は、ちょっと。変だなって思ってたんだ……」

ケイ君は両腕を回し、自らの体を抱き締めた。自分の存在を確認しているようで、震えるほどに悲しい仕草だった。

「タケは三年前とか高校とか言ってたし、やけに懐かしそうな会話が多かったし……チョコなんて、激しくイメチェンしてたしね」

ケイ君は弱々しく笑う。

三年という時間を、『ちょっとの間』だと言ったケイ君。当たり前のことだったんだろう。私達の三年間は、彼にとっては一日だったのだから。

「ショウとタケが鳥居に傷を付けたのも、知ってた。あれは……僕の三日目の記憶なんだ……三年、前の」

ケイ君は音を立てずに立ち上がる。そして小さく、そっか、と呟いた。

「そっか。僕、死んでるんだ」

「……ケイ君！」

ケイ君の体の輪郭が、揺らいだような気がした。私はケイ君の腕を掴もうと手を伸ばしたけれど、彼は笑って私から一歩離れてしまう。

離れていく。

「……菩提樹は、僕に真実をくれたのかなぁ。チョコは、何か手に入った？　欲しいモノ」

ケイ君は屈託のない笑みを浮かべた。私の知っている、純粋なケイ君。優しい、可愛いケイ君の笑顔。

「――ケイ！！」

タケが叫ぶ。今度こそ間違いなく、ケイ君の体に異変が起こった。輪郭がぼやけて、体の先端が――指先や足首の辺りがゆっくりと透けていく。映画のフィルムで見たようなＣＧ映像と似ているようで、全く違う。ケイ君の体は少しずつ、景色と一体化していく。空気に、溶けてしまっている。

「僕、楽しかったんだ。皆が大好きで、仕方なかった」

タケがケイ君のほうへ近づいた。腕を、伸ばす。それは届く事無く空を掴んだ。

ここに居たのに。確かに、在ったのに。一緒に鬼ごっこができたはずのケイ君には、もう触れられない。

「ケイ君、私も」

私は大声で叫んだ。何もせずにはいられなかった。何か、伝えたかった。

「私も、大好き。大好き」

……最後に私の目に映ったのは、彼の笑顔だった。
ケイ君の唇が、なにか形を作る。私は必死で目を凝らした。

――またね。

視界が真っ白に染め上げられた。光なのか、違う何かなのかわからない。白に飲み込まれて何も見えなくなる。
思わず私が目を細めた次の瞬間には、純白の景色は嘘のように消え失せていた。――目の前に広がったのは、風に揺れる樫の木だけ。
ケイ君は、どこにもいない。

「ケイ」

茫然としたような声。タケが呟きが私の頭を覚ます。
……行ってしまった。漠然とそう思った。帰ってこない。もう、私の前には現れてくれない。泣いても、叫んでも、どうにもならない。
この穴が開いたような淋しさを、どう言えば良いんだろう。

「チョコ、ごめんね」

――ミズホの声が、聞こえた。
小さく擦れた声だった。まだ涙の入り混じったその声色は、けれどしっかりとしていた。

「そのままで聞いて」

振り返ろうと体を捻った私を、ミズホの声が優しく押し留める。私の体はそのまま嘘のように動かなくなった。

「……ずっと、ずっと謝りたかったの。ごめんねチョコ。あたし、

自分勝手で。弱くて、我儘でごめんね。チョコを苦しめてごめんね。なんであんなことしたんだろう。なんで、こんなことになっちゃったんだろう……」

ミズホの姿は私からは見えない。けれど彼女は俯いて、泣き腫らした目を擦っているのだろうと思った。
いつもそうして泣くミズホを慰めるのは私の役目だった。

「あたし、もう少し生きていれば良かった。きっと色んなことがあったよね。辛くても我慢してれば、チョコと笑える日があったかもしれないよね」

涙を拭うミズホの手を握ってあげたかった。でも、私の体は動かない。

「死んだら終わり。時間は戻せない。わかってたけど……でも、チョコと話せただけで今日は幸せ。あたし、先に行くね」

ミズホの声がはっきりと境内にこだました。瞬間、急激に私の体温が下がるのを感じる。
気付いたときには、私は再び自由に手足が動かせるようになっていた。
私は体を思い切り反転させる。耳元で囁くような声が聞こえる。

「ごめんね」
「――ミズホ……っ」

私が振り返ったその先には、もうミズホの姿はなかった。

「何で……」

悔しくて、悲しくて、服の裾を握り締めた。
私の親友は、また私の前から消えたんだ。消えてしまった。やっと、やっと会えたのに。
空が柔らかな藍色に染められていた。どんどん明るさが増していく――もうすぐ、朝日が昇る。

「あーあ。ミズホったら、もういっちゃったぁ」

ハナエがゆっくりと立ち上がった。長い髪をかきあげて、私のほうに歩み寄る。後ろから、ショウもやってきた。

「俺達だけになっちまったな」

ショウが笑う。ハナエも笑んで、私の目を真直ぐに見つめた。

「チョコ、思い出した？」

私は頷いた。ハナエは嬉しそうに、よかったぁ、と呟く。

「ハナとショウが欲しかったものはね、ケイ君の魂の自由と、チョコの記憶」

二人は顔を見合わせ、満足気に笑った。

「ケイは自分の死に気付かずに、この場所に魂を縛られてたんだ。俺達は、あいつを自由にしてやりたかった」
「それからね、チョコの心の中に、本当のハナ達を残しておきたかったんだぁ。チョコに、現実を受けとめてほしかった。そのうえで、チョコの心でハナ達を生き続けさせて欲しかったの」

ハナエが何を言いたいのか、私にはわかっていた。思い出していたのだ。
――ケイ君と一緒にトラックの事故に巻き込まれたハナエとショウ。ハナエは救急車で運ばれる最中に、ショウは搬送先の病院で、それぞれ命を落としていたこと。
親友達の死は、私の脳を精神面からひどく傷つけた。私は両親の配慮で転校することになり、そのまま三年間、皆の死に目を背けて生きてきたのだ。

「ハナね、いつ死んでも良いやぁって思ってたんだ。でもやっぱ、お別れは辛いよ。ハナはチョコに、ハナ達が死んだことを受け入れてもらいたい。それでもハナ達はチョコの中に生きてるよって、わかってもらいたい……ハナが死んだこと、ううん、ハナが生きてたこと、チョコに覚えててほしい。だから、今日はここに来たんだよ。チョコはハナの我儘、許してくれるよね？」

私は必死で頷いた。声を出そうとしても全てが嗚咽に変わってしまう。胸が熱くて、締め付けられるようだ。

「タケ。お前さぁ、背ぇ伸びたよな」
「……ショウ」

ショウはタケの前に真直ぐにたった。伸びが悪いことを気にしていたはずのタケの背は、いつの間にかショウを越えていた。

「タケ。大学、ちゃんと行けよ。ミズホみたいなしっかり者と結婚して、俺やハナエみたいな癖のあるガキを生んでもらえ。しっかり働いて、ケイみたいな温和なじーさんになって、チョコとは最後まで仲良くやって、笑って死ね」

「ショウ」
「俺達の分まで生きろなんて言わねぇよ。自分の命一つ分、きっちり使いきってこい。俺は、お前等が来るまで待っててやっから」
涙で視界が歪んで、何も見えなくなった。
瞬きすると瞳から大粒の雫が転がり落ちて、私は慌てて頬を拭く。
「私、皆に――――」
顔を上げると、そこには立ち尽くすタケの後ろ姿だけがあった。
……私の伝えたかったありがとうは、間に合わなかった。

「チョコ」
タケが私の肩に手を置いた。温もりがじわりと体に染み込んで、反射的にまた涙が流れた。
タケに声を掛けられるまで、私は四人の名を繰り返し呟いていたような気がする。頭の中がぼうっとして、熱い靄がかかっているみたいだった。
「俺、お前の記憶が欲しかったんだ。思い出してほしかった、あいつらのこと。お前が来るかも知れないから、今日はここに来たんだ。お前が思い出すきっかけになればいいと思って」

――元気にしてるか。

転校したばかりの私をタケが訪ねてきたのはいつだったろう。

――覚えて、ないのか？

――何言ってんの、タケ。そっちはみんな元気にしてる？

思い返してみれば、タケはずっと一人で戦っていたのだ。

――ああ、元気だよ。

私の為に悩み、行動していた。ずっと一人で悲しみを抱えていた。

――泣いてるの？　タケ。

全てを忘れて暮らしていた私に代わって、涙を流してくれていた。

――なんでもねぇよ。

私は涙を拭い空を見上げる。薄紫の雲の隙間から、白い光が差し込みはじめていた。真直ぐに降り注ぐ金の糸。綺麗で、悲しくて、喉の奥が震えた。

「あいつらを見たとき、夢かと思った。だって嘘みたいだろ。本物の幽霊だぜ？　……でもあいつら、ホント、生き生きしてるんだ。生きてるみたいなんだよ。夢でも俺、嬉しくってさ……」

タケは努めて明るい声を出しているようだった。

ふと彼が目をやった方向を見ると、菩提樹の後方に広がる山々の端からまばゆい光が溢れだしているのが見える。
すぐにそこから金色に燃える太陽の淵が顔を出した。山を覆う雲の合間から一層明るい光が漏れる。
力強い灯の色。命を彷彿させる光景だった。なんだか無性に泣きたくなって私は目を瞑る。

「お前の記憶。あいつらの望みは、俺と一緒だったんだ……菩提樹は約束を守ってくれた。俺達をもう一度逢わせてくれた。永遠もくれた。望みも、叶った」

タケは私の肩から手を下ろす。代わりに腕を掴んで、座り込んでいる私を地面から引き上げた。

「帰ろう、チョコ」

日の出はあまりにも眩しく、純白の光が私の瞳を、涙腺を刺激する。
私は目を細めながら朝日に照らされるタケの顔を見て、小さな声で、けれどはっきりと返事をした。

「うん」

タケは、泣いていた。

そして今日も朝が来る

――厳しい残暑から解放された、爽やかな朝。
小鳥の囀りが涼やかな空気を震わせ、からからと家々の雨戸が開く音が聞こえる。街が目を覚ましたのだ。

「こずえー。今日学校でしょ？　起きなさい」

私達の夏は終わった。本当に、これが最後だった。

あれから私はタケに手を引かれながら神社を後にし、石段をおりた所で別れを告げて家路に着いた。
私とは逆方向に歩いて行くタケの背中が朝日を浴びて、白く淡く光っていたのを覚えている。

私は家族に悟られぬように帰宅すると自分の部屋へ戻り、そのままベッドの上でぼんやりと家族が起きだす気配を感じていた。

「こずえ？」
「起きてるよ」

私は大きく息を吐くと窓を開け放った。柔らかい風が太陽の光を連れて流れ込む。いつも通りの朝。きっと、今日も暑くなるだろう。

「あら、珍しくちゃんと起きたのね。何か張り切ってるの？」

始業式が終わったら、皆の墓を訪ねようと思う。隣街の集合墓地に全員いるのだと、別れ際にタケが言っていた。
――三年も、待たせてしまった。

「別に？　何となく」

中学の夏休み最後の三日は、私達に必然の奇跡をもたらした。
私はもう二度とあの神社へは行かない。確認などする必要はないと、菩提樹は教えてくれた。
私達の永遠は本物だ。ずっと、一緒に。

食卓に目をやると、チョコレートの包みが六つ乗っている。私は頬を弛めると一つを口に放り込み、残りはポケットに入れた。
母が仕事仲間から差し入れてもらったというそのチョコレートは、ほろ苦く口のなかに広がり溶ける。私は舌先でゆっくりそれを転がしながら、鞄を肩に提げて家を出た。

「――行ってきます」

吸い込まれるような空がどこまでも広がっていた。快晴。まさにそんな天気。私はその蒼さの向こうに思いを馳せる。

これから私は年を重ねて、彼らの見ることの叶わなかった未来を生きていくことになる。
生きることは難しい。どんなに必死に生きていたとしても、終わりはあっけなくやってくる。きっと私は何度も挫けるだろう。何度も逃げるだろう。

――それでも。

躓くなら止まっても良い。転んだなら起きれば良い。痛みを知っているから立ち上がれる。

ただ前を見つめて。臆する事無く、ありのままの自分に恥じる事無く歩いて行きたい。

今此処に在る私は、皆の生きていた証だから。

――いつまでも忘れない。貴方と過ごした全ての時間を。

覚えているよ。

ずっと、ずっと。

最後まで。

『最後の三日』――終

そして今日も朝が来る（後書き）

ここまでお付き合いいただき、ありがとうございました。
この話が少しでも皆様の心に届いたなら幸せです。

大切な友人へ捧げる。　　カオリ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6378a/

最後の三日

2010年10月9日00時19分発行